
生かし屋キラー

活字の錬金術師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生かし屋キラー

【Nコード】

N8247Y

【作者名】

活字の錬金術師

【あらすじ】

日本

今、日本は突如地球上に現われた自らを快樂人と名乗る人達に支配されている

今の日本は墮落しすぎている、今や人殺しは日常茶飯事だ。警察も日本から消えた。

そこら辺に死体が転がっている状態・・・と言うわけではない 快
楽人という人達に支配された日本にも法律はある

無法地帯と言うわけではない

が

ほぼ無法地帯だ、ただ法律はある 死体は指定された所に必ず埋め
ることだ

今日本は 二つの職業が増えた

殺し屋と死体埋葬屋だ

人を殺す人と

人を埋める人だ

殺したり 埋めたり 今の日本は腐っている

こんな日本には殺し屋がいる 自分で恨みを持っている人を殺した
ら 恨みを買って 殺される

みんな自分が殺されるのがイヤだ だから 殺し屋という職業に頼
むのだ

その殺し屋の中でも殺した人が最も多い生人きとという青年がいた

ムウーウ（前書き）

この物語は自分が描いた漫画の読み切りをすこしイジリ、小説にしたものです　あまり長くはやらないので
少しの間だけ　おつきあい下さい

ムウーウ

一人・・・二人・・・三人・・・この世に死ぬ人がいるように
生まれる命もある

この物語は人を殺さない殺し屋の話である

エピソードグー依頼

「じゃあな」「また明日」「おう！仕事がんばれ！」

飲み会が終わり店から出てくる男たちの声が響く

「里田武か・・・」

突然空から声がした

里田武と呼ばれた男はふと上を見上げる

ビルに立っている男が目にはいった・・・

「殺し屋キラー執行！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

時はさかのぼる・・・

ボリッボリッ　せんべいをかじる音がきこえる建物

そこには『キラーン家』と書いてある布がぶらさがっている

ザーザッザザーッ　ゴゴゴゴゴー！

ちょうど台風の来る時期であった

ガラッ！！！！キラーン家とかかれた建物の戸が開かれる

「いらっしやい・・・なんかあんの？」

ゴロロロロッロ！

戸をあけた男の後ろで雷が鳴る

「殺してほしいんだ・・・」

「里田を・・・アイツを！！！！！」

「アイツのせいで！！アイツのせいで俺の会社はZONYとの交渉
が・・・！！」

「ふうーん」

興味なさそうな声がきこえる

「そいつどこにいの？どんな顔？」

男は懷から写真を取り出し 里田がよくいく飲み屋を教えた

「さーて仕事すつかなー」

殺し屋キラー

人を殺し依頼主にみせ金を受け取る シュミと自分で言っている

第一章

ム
ウ
ー
ウ

里田が見上げた先には仮面をかぶつて 黒い服を着ている男がいた

高層ビルの上から跳んできた・・・
もう一度

高層ビルの上から・・・跳んできた

高層ビルだ！！高層ビルの上から跳んできたんだ！！自殺！？
つきの光で落ちる男は光る

[illegible]

見事に着地した！しかし男の足はまったく震えていない
 どういう体をしているのだ！？

黒い男の左目が光った

ビビビビ

身長 171.5 cm

ウエスト 70 cm

BCDがCO
FがC

腰から100cmは・・・

— — — — —

この情報を元に死体作成・・・

「よくわかんねーけどなあ」

「！そうだ！！！なんなんだよここ！？」

「ここ？あームウーウっつーところだよムー大陸ってしってるだろそれから名前とった

おれに死体ダミーを作られたやつらはみーんなここにいるんだよ」

「はっ！？いみわかんねーよ！？なんでこんなところにいなきやいけねーんだよ」

「はあー・・・説明だるい！！！」

「お前らが生きてるってばれたら厄介だからだよ！！！」

「んじゃ死体ダミー見せて金もらってくるから！ちよつとまってるよあー！」

「ちよつ・・・おっ・・・」

「・・・っ！」

里田が手を伸ばした時　すでに男は消えていた

・・・・・・・・・・・・・・・依頼主との会話・・・・・・

バタッ

「どうぞ！これくらい痛めつけたけどコレでどうだい？」

依頼主はかなり嬉しそうな顔をして　言った

「ああ・・・こいつだ・・・こいつを殺してほしかったんだ！ありがとう・・・」

「ん」

キラーは手を差し出した

「ん？」

依頼主は不思議そうにこつちをみた

「ん」

キラーはもう一度手を差し出した

「ん・・・」

依頼主は眉間に皺をよせた

・・・沈黙が流れる

すると いきなり 依頼主は手をたたき言った

「ああ！金ですね！」

バタツ！

依頼主は大量の金が入ったキャッシュケースを出した

男は依頼主から金を受け取り光を出しながら消えてった

ジリジリビツ・・・ビツ

・・・
・・・ムウーウ・・・

「あつ！！！！おめー！！！！おれはこれからどうすればいいんだよ！」
戻ってきたキラーに向かって里田は叫んだ

「あーあーうるせーなー だ！かーら！ここで！！！！おまえは暮らすんだよ！」

「な！ん！で！」

「何で理解できないんだよ！」

「おまえはあつちの世界で死んだことにしたの！！！！だーかーらー！！おまえをあつちの世界においてったら おまえが見つかって、おれがペテン師ってことばれちゃうだろ？」

「わかりましたか？」

里田は口を尖らせた

「じこちゅー・・・」

「なんか言った？」

「自己中心的！！！！！！！！！！っていったんだよ！！！」

「うつせつ！」

「・・・あつ！・・・」

キラーはその場にうずくまった

「ちよつと一緒に来てくれ・・・付け根が痛む・・・」

「何でオレがこんな目にあわなきゃいけないんだよ」

「なんやかんやいいながら里田は男へ付いていった

「なあお前キラーって言ってるけどさ本名なの？」

「ん、ああすぐにわかるよ」

「？」

「ついたぞ・・・このオンボロアパートだ」

「・・・周りは噴水とかあってきれいなのにここだけ汚いな・・・」

「建物とか黒いだろ？これさ、でかいガスバーナー使ったりしてる

女がいるんだよ

そいつが黒焦げにしちゃってんの」

「怖いな」

「ああ、怖い」

ガチャンツ！！！！

「おー美央！！付け根が痛むから見てくださいよ！！」

美人がそこにすわっていた

真っ黒な髪の毛が肩までいつていて

フードのついた服の上から工場の作業服を着ている

童顔で赤い頬をしていて大きな目

里田のタイプであった

「んー・・・また痛くなつたのどこ？みせてみて」

美央が立った

「うあつ！？」

里田はおもわず叫んだ

「へっ？」

口を大きくしてぽかーんとしている美央

「フードの上に作業服はわかるぞ・・・わかるぞ・・・」

「ミニスかにニーソックスっておまああああつ！?!?!?!?!?」

萌えーーーー」

「変態めが・・・」

鋭いキラーの声

「おまえにニーソックスのよさがわからないか！ 絶対領域の黄金比を守ってるじゃないかこの美央って子！！！！ちなみに黄金比は4：1：2．5 だ！！！」

「いやー実にはいい絶対領域だ」

「ジロジロ見ないで気持ち悪いから」

「え・・・」

「もう一回言うね ジロジロ見ないで気持ち悪いから」

里田はその場で立ち竦んだ

「気持ち悪い・・・キモ・・・キモチ・・・ガーン」

キラーはため息をついた

「おい美央んなことより見てくれよ」

「あつごめん えつとお・・・どこ？」

「右の肩だよ」

「ちよつとみせてみてー」

キラーは服を脱いだ

そこには3つの縫い線がはいつていた

美央の手が動きナイフのようなものを取り糸を出したそして注射器をだし

とても複雑な作業をしている

キラーのからだを縫っているようにもみえただ切断してるようにも見える

「医学方面に特化していない自分にはよくわからねー 何やってんだこれ」

「んあ？医学方面に特化してもわかんねーよこれ 神様からの天罰だから」

「はあ？」

「よし！オツケー！ちよつと動かしてみてよ！！」

キラーは腕をぶんぶんふった

「おお　痛みが消えた、ありがとう！　また痛くなったらくるよ！
じゃっ」

「あつ　ちよつとまつて　骨と筋肉のチェックするからそこに寝て」
「んあー」

下には大量のパイプのようなものとSDカードのようなものがある

機械と聞いて頭に思い浮かべられるようなものだ

そこには平らな板がありそのうえに大きな板がおいてある

キラーは板と板の間に横になった

「ちよつとこつからは見ちゃだめね」

美央は里田の目を手で覆った

「えっ？」

「すこしグロテスクだから」

びしっべちよつぶっ　べちよべちようぶっ！

「ねえ　何でニーソックスなんかすきななの？」

「俺はこの世の美だと思ってる、男はたいていニーソックス大好きだよ」

「ふーん　生人^{きこ}はじろじろみてこないのに・・・」

「はい！？なんかいった？」

「なにもいって『お楽しみ中わー』が、終わったんで帰っていい？
美央が話しているのに男が叫んだ

「ちよつとまつてすぐに結果出るから」

「あーいーよいーよ、結果は後でメール送ってきてくれよ」

「んじゃっ　いくぞ里田」

「わかった　じゃーあとでメール送るね」

「そろそろ目隠しやめてくれない？」

「あっごめん」

「あまり体いたためちやだめよ生人^{きと}」

「おうっ　じゃあな！」

バタアンツ

「ふうーん・・・ニーソックスって・・・萌えるんだあ・・・」

「！何考えてるんだ・・・あたし」

「おまえキトっていうの？」

「ん、あー　そうだけど？　だからさっきいったろ？すぐわかるって」

「あいつおれのこと生人ってよぶからさ」

「おあついねー」

「たしかに暑いな」

「そっちじゃなくて」

「？」

「それにしてもお前のその体どうしたんだよ・・・」

「縫い目ばかりじゃねーか」

キラーはニヤけながらこう言った

「天罰だよ」

里田は目を大きくした

「天罰？」

「神様がさ　おれに与えた天罰　『おまえのような人間には天罰が必要だっ』て！」

「だからおれは今人を殺さない殺し屋やってんだ」

「え？」

里田は痛々しい物を見ているような目でキラーを見ている

「いや・・・言い過ぎた　なんでもねー」

「気になるだろが！！！」

「うつせえな！なんでもねーつつってんだろ！」

「いや気になるって！」

「う！る！さ！い」

「いずれかわかるんじゃね？」

「いずれかっていつだよ」

「しらね」

「なんだよー おしえろよー」

続く

謎の男達

〈第2章〉

謎の男達

「おまえに教える義理はないよ」

「ちえっ！ケチ」

「ゴソ・・・ゴソ・・・ゴソ・・・」

「いくぞおおおおおおおおおお！！！！　うおおおおおお
おお！」

「なんだなんだ・・・どうしたんだ　誰か叫んでるぞ　キラー」
だだだだ！

路地から大量の人がこちらにむかつてはしってくる

「覚悟おおおおおおおおおおおお！！！！」

グサツ・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

バン！！！！

美央は机を叩いた

飛び散る資料　跳ね上がるキーボード

「筋萎縮！？うそ！」

「アイツ・・・筋萎縮になる理由なんてないのに・・・やっぱり

天罰が・・・」

「早くいかなきゃ・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「うつ・・・」

「キラ・・・」

大量の男達に囲まれている中

目の前でナイフで刺されている　キラが居た。

キラは刺される前に震えていた・・・

そして今も震えている

ゆっくり拳を振り上げたキラは　ナイフを刺したまま体を捻る

刺した人はすこし後ずさりする

ブオッ！！！！

拳がまっすぐ進む、捻りながら前に進むその拳は　キラを刺した
奴へ当たる。

そいつは拳の力で飛ばされた

ズ！！！！キ！！！！

「！！」

「うつ・・・」

「キラ・・・どうした体が震えてるぞ・・・」

「筋肉が・・・」

「え？」 「筋肉が・・・」

「筋肉が言うことを聞かねええええ！！ うああああああああああああああああああああああああああああ！！！」

キラーの叫びで里田は少し後ずさりする
すると・・・

ダッダッダ！ 左の方から足音がする

里田は左をみた

そこには 拳を突き出し 走ってくる男が居た

男は身を乗り出し飛び出してきた

ガッ！

里田は体重を左に移動し 右手で飛んでくる腕をつかみ 左手で男の下半身を抱いた

そして 体重を右に移動し 右手を勢いよく 下におろし 左手を勢いよく上に上げ 投げ飛ばした

「いつきなりなぐりかかってくるってどういう事だボ・・・」

言い終わる前に新手の男がやって来た

男は手を地面におき 下半身を里田に伸ばして 蹴りを入れようとしてきた

里田は手を上に上げながら後ろに飛んだ

そして落ちそうな下半身を足で蹴り上げ、上に上げた両手で下半身をたたき落とした。

「ボケエエエエエエエエエエエエエエエエ！」

里田は脅威の身体能力で一気に二人を軽々と相手にした

が

里田は自分の背後に人がいるのにきがついた

里田の振り向く暇もなく 里田はやられた・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ダッダッダッ 「速く！！速くしなきゃ！ 急がなきゃ！」
美央が走ってくる

ビルの上にそれをのぞく髪の毛の長い男が立っていた。

「・・・・・・・・！！」

美央が駆けつけた時に見たモノは・・・里田とキラの血まみれになっ
て倒れている姿だった

「生人！！」

「あ？」

大量の男の中の一人が振り向いた

「女がこつちくるんじゃないよ！！」

男は美央に近づき殴りかかってきた、その拳は美央にヒットした
よるめく美央はにやけて言った

「いったいな・・・・・・・・もう」

男は眉間に皺を寄せた「言っとくけど・・・・女でも手加減は・・・・」
「一丁・・・・・・・・」

美央は右脚で地面を蹴り男の横に飛んだ 左脚で着地し 曲げた右
脚を回し 力を入れ 男の顔を蹴った！

「逝きますか！！」

ヒットしたと同時に曲げた足を伸ばして 男の肩に踵を落とした
そして再び 男を蹴り飛ばした

ガシッ

飛んでいった男の頭をつかんだ男が居た

がっちりした体型で 親父シャツを着こなし スキンヘッドに太い
眉毛の男だ

「ばかやろっ」

男は頭をつかんだまま　腕を後ろにおもつきし引き　顔を地面にたたきつけた

「女に攻撃してんじゃねーよ!!」

男はたたきつけた血だらけの顔を持ち上げ 放り投げた

「！！」 「女に攻撃しちゃいけないってのは．．．いい心構えじゃない．．．」

男はこちらを睨んだ「攻撃はしねえけど 動けねえようにする事はできるんだぜ」

「やっぱ心構え悪いね君たち・・・」

「おい持ってきたロープでそいつ縛っとけ」

「押忍！」

男達はロープを美央に縛り付けた

「あんた達……なにが望み？」

縛られた状態で美央が聞いた

ガツチリした男が叫んだ「ムウーウからの解放だ!!!!!!!!!!」

美央は下を向きしゃべらなかつた。「……………」

沈黙が流れた

次の瞬間 美央が頭を上げ 叫んだ

「バアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアア力!!!!」

続く

過去の過ち

〔第三章〕

過去の過ち

日本

今、日本は突如地球上に現われた自らを快樂人と名乗る人達に支配されている

今の日本は墮落しすぎている、今や人殺しは日常茶飯事だ。警察も日本から消えた。

そこら辺に死体が転がっている状態・・・と言うわけではない 快樂人という人達に支配された日本にも法律はある

無法地帯と言うわけではない

が

ほぼ無法地帯だ、ただ法律はある 死体は指定された所に必ず埋めることだ

今日本は 二つの職業が増えた

殺し屋と死体埋葬屋だ

人を殺す人と

人を埋める人だ

殺したり 埋めたり 今の日本は腐っている

こんな日本には殺し屋がいる 自分で恨みを持つている人を殺したら 恨みを買って 殺される

みんな自分が殺されるのがイヤだ　だから　殺し屋という職業に頼むのだ

その殺し屋の中でも殺した人が最も多い生人という青年がいた

[illegible]

「バアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアあああああか！」

「あんた達さ！！生人の事なあああああああんにもし
らないでしょ！！」

「お伽噺してあげるよ……」

「人を殺す専門の職業『殺し屋』がいました」

「その『殺し屋』は神様に天罰を下されました　体をバラバラにされ　またつけあわされました、そして意味の分からない顔に引っ付いてとれない仮面をつけられました。」

「てきとうに付け合わされたので 付け根がすごく痛みます」

「幼馴染の医者になおしてくれと縋りました、幼馴染は頑張って治そうとしました！ 昔よりは痛みは和らぎました」

「しかしまだ付け根はいたむので幼馴染に治療してもらってます」

「神様は天罰を下すときいいました。30億集めてなおかつ人を殺さなければ、元に戻してやろう」と」

「そんなお金を集めることは困難なので 神様は力を与えました」

「左目でいろんな事ができるようになりました！今その力で殺し屋と名乗って人を殺さない殺し屋をしています！」

「今日でやっと！」

「29億8960万貯まりました・・・」

「明日大きな取引があるから3億たまる!! そしたらムウーウの人達を戻してやろう!!」

「言っただんだよ……その殺し屋……生人が……」

「それなのに……あんだ達！！何も知らないのに 生人の考え知らないのに！！」

ガツチリした男はしゃべり出した

「ああ・・・そうなのか・・・でもよおキラーは俺たちになんも話してくれなかった 自業自得じゃねーのか」

「でもよオ……オメエには罪はないよな……」

男はロープをほどいた

そして男達の方に振り向き首を縦に振った

男達は一斉に地面に手を突き

頭を勢いよく地面にたたきつけた

「悪かった!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

美央はにやけた

「なんだ話通じるじゃない」

「オイ」

ゴ
ソ
ツ
・
・
・

キラーが立ち上がり言った

「みつともねえことすんな・・・ 男が頭を下げるな・・・」
「立てよ」

ガツチリした男は言った「別にお前に頭を下げてるわけじゃねーんだからいいじゃねーか」

「明日まで待つてやるから 今日の事は この俺 ひきだし引出 ふすま襖に免じて 許してくれよ」

襖が頭を下げようとしたときビルの上から声が聞こえてきた

「あーあ 終わっちった・・・」

空から長い髪の毛を靡かせた人が振ってきた

トッ！

男が落ちた来た時足音が全くしなかった

キラーは後ろに下がった

タツ・・・タツ・・・タツ

「もうすこしさわいでんの見たかったのにイ・・・」

キラーは仮面の外側からでもわかるぐらいに 目を大きく見開いた
「神・・・」

「よオ」

ふあさ・・・

膝のあたりまで伸びた長い髪を垂らした 真っ白な、ボタンがたくさんついた服を着ていて

白いぶかぶかなズボンをはいている男は言った

「罪人」

キラーはかなり震えている

「神様！！！」

「神様？」

襖はかなり不思議そうな顔をしている

キラーは少し驚いたような口調でいった

「筋肉が動く！？」

神様は一瞬にしてキラーに近付き 言った

「ああ！！ 面白そうだったから お前の筋肉萎縮させたんだ！！！」

襖は眉間に皺を寄せ鋭い眼光でキラーと神様と呼ばれている男を睨んだ

「神様って何だよ！」

続く

楽しむ男

〔第四章〕

楽しむ男

「神様って何だよ!」

「ああ・・・神様つつつても創造主とかそういうのじゃないからね、あくまでも神様って名前のフツツーの人だからさ」

神様は言った

「ふつう!? ふざけんなよ!! 異常じゃねえか!!」

「・・・」

神様はすこし不機嫌そうに言う

「ああ・・・そうだ」

「明日で30億たまるんだろ?」

キラーは戸惑った、今まで神様と話した事はほとんどないのだ

「あ・・・ああ・・・」

「明日やるのは面倒だから今やっところかな・・・」

神様は右脚を上げた

ダッ!

その右脚で強く地面を蹴った

一瞬にしキラーの目の前に飛んでいった

「!!!」

バヂッ!!!!!!

「解放してやるよ・・・」

神様は笑みを浮かべた、そして・・・叫んだ

「罪人!!!!!!」

そして一筋の稲妻がキラーの体を横切った、その一筋の稲妻から無数の雷が散った

ヂヂヂヂヂヂヂヂヂヂ！ 音を立てながら広がっていくその雷の動きが止まった雷はどんどん小さくなり、キラーの中心へ集まっていく。

キラーは四肢を大きく開き空中に浮かんだ

その雷がある程度ちいさくなったあと、また、周りへ散った

「うおっ！」

そして雷は、消えた

「！」キラーは慌ててネクタイを外した

そして来ているスーツを右へずらし右肩を見た、キラーは叫んだ・

「！！体が治ってる！！！！！！！！！！」

そう、そこにあっただはずの縫い目、いや、傷が無くなっているのだ

キラーは全身の傷を探し始めた

しかし、残っている傷は・・・

無かった（ナツシング）

「・・・何で戻した？」

服を戻しながらキラーは聞いた

「オレ・・・待つ嫌いなんだよ・・・明日でたまるんだったら別にそれでいいさ。」

キラーは取り乱した

「オレアお前の考えがわからねえよ！」

「わかんねえ・・・か、わかんなくていいさ・・・」

「オレはこの世界を楽しむんだ・・・!!」
「オレはもつと楽しむ」

先ほど神様が降りてきたビルの扉に人影が見えた
神様が動揺した「まさか!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

人影がどんどん大きくなってきた
「人生!!」

顔がだんだん見えてきた
「楽しもうぜ!!」

その男は腰に刀を差していて、服ははだけている、だらしのなさそ
うな姿をしている。

神様は汗をかき、口を震わす

「兄貴・・・」

「よ!」

「何しに来た!」

神様は聞いた

そしてその兄貴と呼ばれる男はすこし残念そうな顔をしていった
「ひどいなア・・・忘れたの?」

次の瞬間男の口が大きく開いた

「オレは人生を楽しむ為だけに生きてる!」

「我楽しむ!故に我有り!」

男は言い終わると共に牙を剥きだし、不気味な笑みを浮かべた・・・

続く

兄貴（前書き）

5話でもつすでに終盤に近付いてきました。

兄貴

第五章

兄貴

「我樂しむ！故に我有り！」

「おい、神様よ、そいつかしてくれよ！樂しむ！」

神様は自分の兄貴らしき男へ飛んでいった

「意味わかんねえよ」

頭をその兄貴と呼ばれた男にぶつけた

頭をぶつけたが、男は微動だにしないで

「ケンカさせろってことだよ、おバカさん」

と言った

「イヤだ！」

神様は左手を前に置き右手を引いた

それと同時に神様の兄貴らしき男は両手を反り後ろに反り返した

地面に手を突いた

神様が右手を前へ出したと同時に

口を小さく開けていった「ちえ・・・」

地面に突いた曲げられた手が伸びた

「ケチ」

男は飛んでいった

その足で神様の右手をけった

神様は地面を蹴り、バク転しながら後ろへ飛んでいった。

バク転し、右手を地面に置き、後ろへ行く自分の動きを止めた。

「！！」

兄貴はこちらに走ってきた、そして右脚を上げ神様の顔を蹴ろうとした

神様は顎を上げた、顎を上へ上げたおかげで自分の一番上が鼻とな

り高さが変動し、当たらなかった。

神様は兄貴が足を戻している隙にしゃがみ右脚で兄貴の足をひっかけようとしたがジャンプされ よけられた。

そして兄貴の左の腰に差ししていた刀を抜き神様の腹を切りにかかった。

プツ・・・プツ・・・切った後遅れて血が一滴ずつ出てきた。

刀には血が付着している

神様のお腹から血が出ていなかった時にすでに付着していたその刀についた血を振り払った。

「かあつ！！」

ブオツ！！！！

神様のお腹からいつきに血が噴き出してきた

「うつ・・・」

血を噴き出しゆっくりと地面へ倒れていく。

「クソツ・・・つたれ・・・ハゲが・・・」

神様は嫌味を言い倒れた

バツ・・・

兄貴はそれを見届けた、

そしてこういった

「俺たちのルール。欲しい者はケンカで勝ち取る、だろ？」

「っーか、ハゲとらん」

そこに集まった襖や美央や男達は絶句した

兄貴はすぐにキラの顔を見て 近付いた

そして左手をキラの右肩に置いた

「刎・・・お前さ」

「オレのおもちやに」 「成れ！！！！！！！！！！」

兄貴は牙を出しほえんだ

「こいつやバイ・・・！狂気の塊としか思えねえ！！」

「はじめよっか！」

兄貴は頭を傾かせて目を細くし笑った
グッ！！

左手でつかむ力が増していく

キラーは逃げようと後ろへ飛ばうとしたが、右肩が固定されていて動けない

「！！」

兄貴は右腕を捻りキラの顔へ飛ばした

ブン!!!!!!!!!!!!!!

ガッ！その拳はちょうどキラの顔のど真ん中へ飛んだ
右肩をつかんでいた左手を放した

キラーは飛んでいった

ズズズズズッ……キラーは地面に体をこすりつけながら飛んでいった。

続

兄貴（後書き）

そろそろ終わりそうです、最後まで見届けていただけると嬉しいですよ。

感想書いて下さい。お願いしますm（．．）m
悪いところバンバンバンバンバーンバンかいて下さい
ね！

快樂者・快樂人

第六章

快樂者・快樂人

飛んでいったキラーに向けて 兄貴は言った
「もちろん手加減はしたよオ」

「・・・！！・・・はあ・・・はあ・・・」

「ん・・・はあ・・・はあ」

キラーはヨロヨロしながら立ち上がった

「ひとつ・・・質問して・・・いいか・・・？」

必死に立ち上がろうとし、話すのもままならない状態でキラーは問う

「おまえら快樂人は・・・はあ・・・人を殺した人を・・・一人・・・所有できる・・・」

「そうだろう？」

「ああ、間違えない」

「人の・・・所有物を・・・取り上げても・・・法には ふれないのか・・・？」

兄貴は右手で頭をかきながら 参ったな という顔で言った

「・・・うん、どうだろね 俺たちは異端だけどさ、法はもつと異端なんだ・・・ふれないかもしれないよ、俺あんま詳しくないからよくわからないな」

「で」

「それ聞いてどうするの？」

兄貴は自分の頭をキラーの仮面にぶつけた

ちょうど先ほど殴った場所にぶつけた

「！っあー！！」

キラーは後ろへ向かって後ろ走りした。

それを追って兄貴は走った

そして 言った

「皮膚の下つてもろいんだ、集中して攻撃すると痛^{いて}えー」

兄貴はキラーの左側へ跳んで言った

そして左手を前へ伸ばした

「そうだな！！あの譲ちゃんみたいに御伽噺しながらやろっぜ」

「俺たちが生まれる話をしよう」

そっういと共に左手を大きく回した

ガッ！！！！ 回した左手でキラーの首を叩いた

「昔あるところに人を殺して楽しんでいる人がいました」

首を叩かれて地面にむかって落ちていくキラーのおなかを強く蹴りあげた

「その人はやがて、捕まり死刑になりました」

「その人は人を殺すのが大好きで自分も自分で殺したかった」

「と」「嘆き」

「魂は成仏できませんでした、魂は『もっと……！もっと！もっと殺したい！』という意志で動きました」

蹴りあげられたキラーは落ちてきた

そのおなかにこぶしを一発くらわせた

「やがて魂はたくさん人を殺めている人を見つけその人に憑きました」

「ぐっおっ！！！」

キラーは大量の血を吐いた

「その人は自身を快楽者と呼び、再び人を殺めました、やがて『まだ……まだ殺したりない！』というようになりました」

「この快楽をいろんな人に分け与えたい！と思い何かの魔法を使い快楽人という快楽だけを求める人を人為的に創り出したのです」

「その快楽者は法を作りそれを犯した人を取り締まるルールを作りました」

背中の上にある足を振り払い、立ち上がった

左足で地面を蹴り　兄貴の方・・・いや・・・快樂人の方へ飛んだ
右足を曲げ、飛んでいった、快樂人はとっさに左手を出した

「やっぱりな．．．」

キラーは呟いた

キラーは左足で前に行くのを止め、右足をのばし両足で地上にたつた

そして右足をぐりりと回し、後退した

快樂人の左手はキラの目の前を通り過ぎる

「な・・につ！」

右手を強くにぎり 右ひじを曲げた

キラーは腰を左に回した、それと同時ににぎりしめた右手が自然に

キラーは心の中でずっと念じていた「まだだ……まだだいじょうぶだ……まだ体を擦じれる」

体を捻るには丁度いい立ち位置だった

キラーは全力で体を回した

「……」

まげてあつた右手はその言葉と同時に伸ばされた

「仕返し!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

快樂人は両足を引きずりながら飛んでいった

「手加減はしてないけどな」

「ちなみにお前が手と足を交互に使うことに気づいたんだ、後はお前の攻撃パターンを予測すれば」

「軽々とよけることが出来ると言うことにも気がついた!!!!!!!!!!」

キラーは血をたらし、満面の笑みを浮かべ 言った

「お前はオレに勝てない!!!!!!」

「喧嘩する事しか脳にないやつはオレには勝てないんだよ!!!!!!!!!!」

続く

快楽者・快楽人（後書き）

これで36Pです

ちなみに45Pの読みきりなんで

もうすぐおわってしまいそうです。

本当にもうすこしなんで、最後まで見届けてくれたらうれしいです。
では、次話乞うご期待

絶体絶命

（第7話）

絶体絶命

「ふっ・・・」

兄貴が左手で顔を押さえた

「っざけんな！！・・・なめやがって！」

快樂人は体重を前にかけ、後ろへ行こうとする体を止めた

「これだったら、わかんねーだろ！！」

快樂人はキラーの周りを走り回ってそう言つと同時に差していた刀を取り出し、キラーに突きだした。

「生人お！！」「キラー！」「殺し屋！」

キラーが応戦しようとしている時に一斉に声が聞こえた

「頑張つてえ！」「やれ！キラー」「殺し屋お前ならできる」「いけー」

真央と立ち上がったばかりの里田、そして襖達がキラーを応援している

キラーは真央達を見て、親指を立てた

「おう！！任せとけ！」

しかし、その応援は意味が無かったのかもしれない

キラーは真央達に気を取られ、快樂人に気づかなかつたのだ。

快樂人がすぐ右で刀を大きく振りかぶり、飛んできた。

「！！！」

キラーは反応できなかった・・・

ざっ！！！！！！

快樂人は刀をキラーの腹に刺した

「うつ・・・！！！！」

「あああああああああつ！ぐっ・・・あああああああああ
あああああああああああああああああああ」

腹から刺さった刀は背中を突き破っていた

大量の血が垂れてきた。キラーの口からまた血が出てきた
バツ！

キラーはその場に倒れた

そのまま倒れると刀が地面に押されてしまうので

右肩を地面につけ倒れた

キラーはその状態で動かなかった

目は閉じられていた・・・

すぐにキラーの目は開かれた

「！！！」

キラーは何かを見つけたように、立ち上がり、歩いて行く。

いや、歩いているというよりも前に倒れては立ち上がるの繰り返し
だった。

快樂人はそれを楽しそうに見ている

キラーが倒れて三回目、キラーは左手を伸ばした、伸ばした先には、

神様が倒れていた

神様は「殺し屋・・・」と一言言った、どうやら神様はまだ息絶えていないみたいだ

キラーは腕を使いすこし前へ進んだ、そして左手をめいっぱいのばした。

ザッ！神様の開かれてた手の前に落ちていた本を、キラーは自分の方へ引き摺ってきた

そしてキラーは肘を立ててその本を読んだ。

「！！！」

キラーは今まで以上に、希望に満ちた顔で、ニヤけた

「あんがとよ、神様」

左手をズボンのポケットに突っ込んだ

その時里田がキラーはかなり危険な状態という事を改めて察知したお腹を刺されて頭まで可笑しくなって「あんがとよ、神様」と言ったのだと思ったのだ

里田は慌てて男達に言った「加勢だ！」

ボン！！！！！！！！！！

そのときキラーはポケットから何かをとりだし、地面に叩きつけた。

「けむっ！！！！」

快楽人は咳き込んだ

「チッ！」

「逃げようつたって、無駄だ！！！」

快楽人は刀を振って、周りの煙を瞬時に消した

煙はたちまち消えてった

「！！！」

快楽人は目を大きく開けた

「うそ・・・！！！」

真央は地面にしゃがみ込み、口を押さえた

「マジ・・・かよ・・・」

「おい！どういうことだ！」「アイツやっぱり頭可笑しくなったんだ！」「くそっ！！！！なんでだよ！！！！」

男達は見た・・・そこにあつたものを・・・

男達が見た物は・・・・・・・・・・・・・・・・・・

続く

絶体絶命（後書き）

これで39Pになります、次回最終回です。
いつ更新かわかりませんが、期待しててください。
最高のラストにします。

生かし屋キラー（前書き）

さて、さて、最終回。 続編はかきません。 多分。番外編も。

じゃ、ラスト、楽しんでって下さい!!!!!!!!!!!!!!

生かし屋キラー

男達を見た。

キラーの死体を

いや、キラーの死体らしき物だ

腹に刺さった刀の位置が変わっていた、刺さった刀をおもいつきり脇腹にむかい引いたようだった。腹から臓器や骨などが出ている、血は青黒く、血痕を残している。

快樂人は目を大きくし、キラーの死体・・・らしきものに近付いた。そしてキラーの死体らしきものの首に手をつけた、快樂人は脈をはかっているのだ。

しかし、脈が動く気配がない

「脈・・・無い」

快樂人は手を首から話、腕を大きく開き、首を上げ、叫んだ

「勝った!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「次回から『快樂人』始まるよ」

「生かし屋キラー、最終回、完————」

あとがき

いやあ、やっと書き終えましたよ。いや、僕ね、活字の錬金術師は、主人公をも殺してしまうんですよ、ハハ。

僕は新しい感じの作品を書きたいと思って、主人公を殺す、という前代未聞の作品を書いたんですよ

最終回ですべての伏線を回収する、なんていう作品もいっぱいありますが、回収しない、読者に考えてもらう作品が良かったのですよね。

で、今回のこの作品はですね、そういうのを意識して書いたんですよでは、次の作品で……と、言い忘れてました。

キラーの死体らしきものと書いたのは、意味があったんですよー、なんでしょう、これも多分伏線だと思います、回収しないとおもいますよ、この伏線は、ひよっとしたらどっから、かつこい殺し屋さんをやつて来て、ひよいと、回収してくれるかもしれませんね、では、生かし屋キラー、ご愛読ありがとうございました!!!

b y 活字の錬金術師

「な—んて、言うと思った？まだ終わらないよ、
『快樂人』？冗談

じゃないよ、僕が主人公だよ、主人公を殺す？そんな事したら、作品自体が終わっちゃうジャン。それで他の奴を主人公にして、実はコイツが主人公でした！とか言う？、伏線回収しないとか、モヤモヤしてたまらないじゃん、そんな作品おれは読みたくないね、ましてや読者に考えさせるとか、ずうずうしいにもほどがあるね、主人公が死んで、バッドエンド、いやだなあ、ひよいと回収してくれる殺し屋？俺のことかな？まあ、さ、結局さ、俺が言いたいことは、そんなことをしようとする活字の錬金術師とか言う奴は氣にくわな
 いてって事、以上」

[illegible]

快樂人のすぐ後ろからキラーは飛んできた

「んでっ!？」

「さて、伏線を回収するでしょう。」

キラは両手を大きく広げ、開かれた快樂人の腕をたたき落とした。そして、両手を素早く動かした、そうしたらキラの両手に短剣が現われた。

「神様の本に感謝しなきゃな・・・『快樂人の法』よませてもらった、本のタイトルには凝つてもらいたいね、シンプルすぎるだろ？」

キラーは左の短剣で快樂人の背中を裂いた

「おかしいと思ったんだよねー、
アイツがオレを元に戻したとき、法
にふれてないか」

「まだ30億ためてないのに、そんなことが可能なのか・・・しかしな、条件は30億じゃなかったんだ」

キラは右の短剣で、快樂人の背中についた傷に交わるように快樂人の背中を切った

「皮膚の下つてもろいんだってな、お前がおしえてくれたことだよ」

「さて、話をもどそう」

「条件は30億じゃなかったんだ、そうではなく一年間、一年間だ」

けで良かった、人を殺してなければ良かったのだ」

「人を所有するのにも、条件があつたのだ」

「たくさん人を殺した人しか所有できない、所有する前に罰を下し、戻るために守らなければならぬルールを所有したい人に伝えるんだ、そのルールは、『人を殺さない+嘘のルール』にする、元々絶対のルールが決まっていたんだ、しかしそのルールと自分で考えた偽のルールを合わせ、伝え、守らせる、オレの場合嘘のルールは30億だった、そして本当のルールは『人を殺さない』だ」

「そして、今日10月14日、それはオレと神様^{アイツ}が会って1年目なんだよ」

「快楽者の本当の目的を知ってるか？「殺人を減らす」のが目的だったわけだろうか、なぜ人を殺した人に罰を下すのか、その答えをオレは知らない、これこそ、読者に回収してもらつ伏線かもしれないね」

「だから、人を殺した人を戒めるような事をお前等にやらせるんだ、最も、お前はこういう知識0（ゼロ）だろうけど」

快楽人は長い話をしている間、立ち竦んでいた、今ようやくキラのほうへ振り向いた、が、しかし、そこにキラはいなかった、キラは異常なスピードで快楽人の後ろへ回り込んでいたのだ。

「さて、本題、何故オレの死体があるかだ」

キラは短剣を握りなおした、そして高く振り上げ、快楽人の肩目がけ、振り下ろす

「元々、オレの左目の力は30億ためる為にもらつたんだよ」

その短剣は快楽人の肩に直撃した、そして貫通した、むごい声をだしながら快楽人は膝をついた

キラは続ける

「嘘のルールを本当だと思わせるため、嘘のルールを遂行させる補助をすることができる、『快楽人の法』にはこう記されていた『所有物の補助は一度限り』と、おれの左目の力、これはオレの補助だ、一度限りのな、おれはその力を使つたんだ、補助っていうのは、嘘

のルールを達成したら無くなるんだ、オレはまだ30億貯めていない」

そういうとキラーは仮面に手をかけた

「あーなんか頭ゴチャゴチャしてきたな、オレが」

キラーは下を向きながら仮面を外した、そして、髪の毛を振った

「まー、簡潔に言っと」

キラーは徐々に顔を上げた

「オレの左目は健在！」

「だから、オレの死体ダミーを作れたのさ、オレの左目の能力でね。」

キラーの左目は黒く、その中に白い光が広がっていた、正方形に近い形で左ほほの大部分の大半を占めていた

黒い目は見た物を怖がらせるような目だった、それと相反してキラーの右目は優しく、それであって、どこことなく鋭い眼光の黒目であった。

キラーと快樂人は向き合った、どちらも真顔で向き合い同時言った

「オレの」

キラーは指を大きく開き自分の胸の前に上げた

快樂人は立ち上がり四肢を大きく開き

後ろへ向かって倒れていった

「勝ちだ！！負けだ！！」

二人の声はムウーウ全体に響き渡った

快樂人は笑みを浮かべ、倒れていき、キラもまた笑みをうかべた、そして、キラもゆつくりと倒れていった
バツ・・・もう砂ホコリは、終戦を意味した。

美央、里田、襖が率いる男たち、襖、彼らも笑みをうかべた。
この瞬間、彼らだけでなく世界中で笑みが浮かべられたように思えた。

彼らはキラの元へ走って行った

「胸上げだ!」「手伝え!!!」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

キラは「いてえよ!やめろよ!いくら左目の力でもお腹の痛み消すの限度あんだぞ!さすがに押されたら痛いぜ!」
とサラッと何故自分が立っていられるかを言った

キラの話そつちのけで彼らは胸上げた

「いてっ!いった!ちょ!!まああああああああああ!」

キラの周りは賑やかだった

全員がキラの所へ行ったと思った

違った

快樂人や神様（神様も快樂人なのだけど、区別するために神様とする）の周りにも人が集まってきてた

美央と里田だ

快樂人の横に美央がすわった、そして快樂人は言った「殺し屋アイツのとかいってやれよ」

美央はすこし悲しそうな、誰かが遠ざかったような顔で言った「うん、アイツはもう十分よ」

「そう!!あんだ名前何?」

そう話を切り替えた

快樂人はいやな顔をし、答えた

「・・・仙人^{せんじん}」

美央は吹き出した

「神様の次は仙人？・・・ブアハハハハハハ！」

仙人はさらにいやな顔をした

「悪いな、こんな名前で」

「いや、悪い悪い、ごめんね、ちょっと面白かったからさ」

里田は神様のところへいつていた

そして美央と同じようにアイツは十分と言った

美央と里田は同時にこう言った

同時に快樂人に言った

「アンタも心配してくれる人を探しな？ 友達とかね、今はさ『オレたち、私たち』が友達になってやるよ」

「仙人！」 「神様！」

仙人と神様は水を垂らした、目から水を垂らした

キラーはそれを見逃さなかった、キラーはそれを見て、今まで以上、本を見つけた時以上に笑みを浮かべた

「さて・・・」

「おい！！ちょっとおろしてくれ！！」

キラーは胸上げを止めさせた

そして、美央のほうへあるいていった

「美央、俺いいこと思いついたんだよね」

「？」

『それから』

ある町で刀を持った殺し屋が人を狙っていた
大きく跳び刀をふりかざし、ターゲットを狙っていた。
「殺し屋です」
と言いつターゲットへ飛びかかった

『キラーは』

そこにターゲットを飛び越え、後ろにいる殺し屋の手めがけて足を
伸ばしている白目の部分が黒く、眼球の部分が光っている男がいた、
その男はその手を蹴飛ばした

『人を』

『生かしている』

その男はこう叫んだ

「生かし屋キラーだあ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

『キラーは』

『殺さない殺し屋から、人を生かす生かし屋になった』

『生かし屋キラー』

生かし屋キラー（後書き）

さて、本当のあとがきです、どうでしたか、自分が全力を尽くした作品になりました、この話は完結作品と表示されません。

なぜかという完結設定の「この話で完結します。」を選んでないからです。

それは、キラーの人生はこれからも続くからです。

僕が勝手に主人公を殺してしまうのと同じように

かつてに完結させるのはずうずうしいと思うんです。

もう続編は書かないですが。

みなさんのこころの中で、キラーのこれからの人生を想像してください

そして、この作品にまだある謎、快楽者の謎

それを自分たちで考えてみてください。

それこそ読者に複線を回収してもらって、ですね

これからの人生

道で殺し屋に狙われるかもしれません。

そういうときはあの人の名前を叫んでみてください

左目が黒い、わざと30億ためなかった男が助けに来てくれるかもしれません。

では、またどこかで会いましょう。

by 活字の錬金術師

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8247y/>

生かし屋キラー

2011年12月19日18時49分発行